「コンクリート甲子園」に対する支援について

2024年10月23日
北海道生コンクリート工業組合

今年で 17回目の開催となる「コンクリート甲子園」は、令和6年 12 月7日(土)、香川県生コンクリート工業組合技術試験センターにおいて開催されます。
今年は、全国から過去最多となる44校45チームの参加申し込みがあり、9月28日(土)に開催された予選の結果、10 チームの本選出場が決定しました。
北海道ブロックからは札幌工業高校、釧路工業高校の2チームがチャレンジ、札幌工業高校が予選を通過しました。

道工組としては、引き続き札幌工業高校に対し技術指導(札幌分会)を行うとともに、本選出場旅費の補助を行うこととします。

コンクリート甲子園マスコットキャラクター
クリートン　コンコ

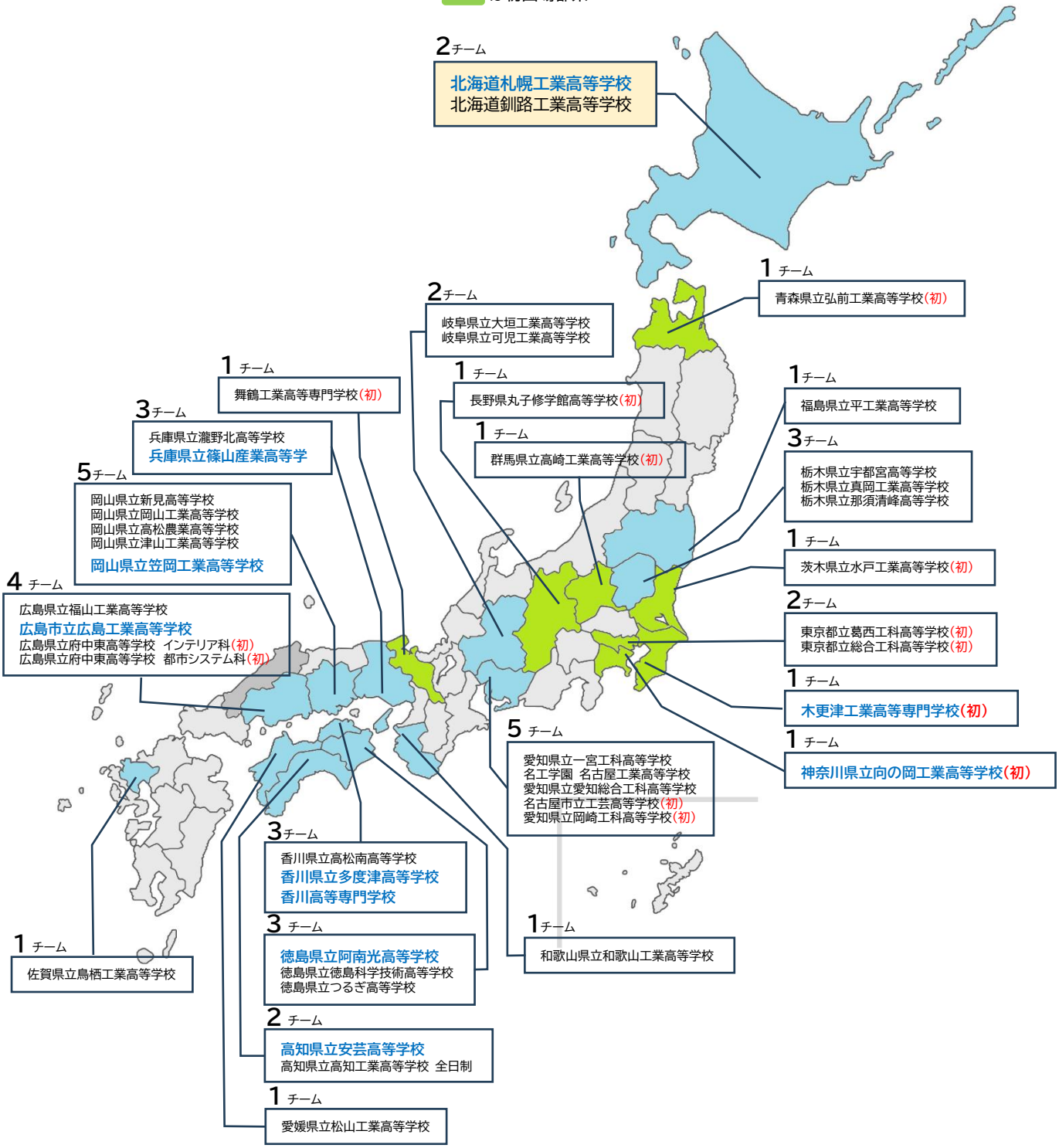
コンクリート甲子園とは？

コンクリート甲子園を通して、身近な建設材料であるコンクリートを知ってもらうことを目的にしています。実際のコンクリートに触れ、自ら作業を行うことで基礎知識を身に付けてもらい、そして、本大会に参加することにより、参加生徒相互の交流を深めるとともに他校の工夫や発表等を聴き、幅広い考え方を身に付けることも可能です。

《第 17回コンクリート甲子園参加校》

全44校45チーム　青字は本選出場 10 校

は初出場都県



セメント新聞　2024(R6) 10月7日 (1)

コンクリート甲子園

本選出場10校を選出

12月7日に香川で開催

第17回コンクリート甲子園の本選出場校が決定した。全国から初出場2校を含む10校が選出された。

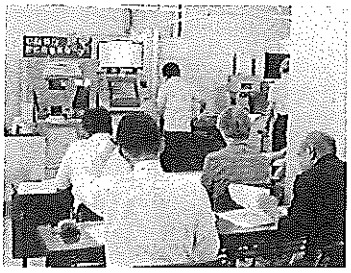
予選は9月28日に香川県生コンクリート工業組合技術試験センターで行われ、強度部門を審査。軽量かつ目標強度である20N／㎟に最も近いチームから順位付けを行い上位10校が選出。

全生連の斎藤昇一会長は「今回は。過去最多の45校に参加していただいた。これも各校の先生方に積極的に取り組んでいただいたおかげである。また各地域の工組、協組も様々な形で参加校を支援した。来年度は東京に場所を移して開催するが、さらに参加校が増えることを期待している」としている。

第17回コンクリート甲子園の本選は、12月7日に開催される強度部門、プレゼンテーション部門、デザイン部門の3部門で競い、総合優勝を決定する。

本選出場校は次の通り。

▽高知県立安芸高等学校▽徳島県立阿南光高等学校▽兵庫県立篠山産業高等学校▽木更津工業高等専門学校（初出場）▽北海道札幌工業高等学校▽岡山県立笠岡工業高等学校▽神奈川県立向の岡工業高等学校（初出場）▽香川県立多度津高等学校▽香川高等専門学校▽広島市立広島工業高等学校



予選の風景

コンクリート新聞　2024(R6)　10月10日（1）

本選出場10校決定

コンクリート甲子園

第17回コンクリート甲子園の予選が9月28日、高松市の香川県生コンクリート工業組合技術試験センターで開かれた。過去最多44校45チームから会場に送付されたコンクリート供試体2本を強度試験で審査し、本選に出場する10校を選出した。本選出場校は次の通り。

▽北海道札幌工業高校土木科▽木更津工業高専環境都市工学科▽神奈川県立向の岡工業高校建設科・建築コース▽兵庫県立篠山産業高校電気建設工学科建設コース▽岡山県立笠岡工業高校環境土木科▽広島市立広島工業高校建築科▽徳島県立阿南光高校都市環境システム科▽香川県立多度津高校土木科▽香川高専建設環境工学科▽高知県立安芸高校機械土木科土木専攻

強度試験は審査委員の立会いの下、軽量さと目標強度20N／㎟への近さで審査した。

13チームが初参加し、これまで最多だった昨年の32校を大きく上回った。香川工組技術試験センターの新居宏美所長代理は「全生連の斎藤昇一会長が先陣を切って各地で甲子園のPR活動を展開したことが実を結んだと実感した」と振り返り、「供試体が到着する度に、常連校ならば『今年はどんな結果を出すのだろうか』と顔が緩み、逆に初出場校には『負けないで』と心の中でエールを送っていた。予選では、審査員も事務局の先生も立ち会った皆が各学校の強度試験結果に驚く声を上げるほど素晴らしい結果が続出し、接戦だった」、「ほんの僅かな差で予選敗退となった学校には心が痛んだが、本選への切符を得た学校がどんな戦いを見せてくれるのか期待が膨らんでいる」と語った。

本選は12月7日に同センターで開く。同ルールの強度試験にデザイン、プレゼンテーションを加えた3部門で審査する。香川での開催は今回が最後となり、来年度以降は関東での開催が予定される。

9月30日の全生連の会見で斎藤会長が「45チームで予選をできたこと自体がありがたい」と言及し、出場校の担当教員、学校を支援する各生コン工組や生コン会社などへの謝意を示した。生コン業界からの高校への発信について「この歩みを止めずに学校へのPRを進めていきたい。来年予選に出る学校がもっと増えるように、将来的には、例えば東西に分けて予選を行えるくらいに応募が増えたら」と展望した。